

新

歌人群像

## 引野 收

● 死と直面した生への賛歌

● 米満英男 ●



## 不運と道連れの過酷な出立

不運——としか言いようのない、凄まじい生涯を終えた歌人がいた。だが、必ずしもその一生は、救いのない不幸な生き方そのものであったとは言いきれない。

引野收は、一九一八（大正七）年に、愛知県名古屋で生まれた。これが不運の始まりである。というのは、医者であった父（隆郷—姓氏不詳）の妾腹の子であったため、実子として認知されぬまま、兵庫県神戸市須磨の引野家に養子として出されている。両家を繋ぐいきさつは不明である。

地元の中学校を卒業したあと、養父保久の縁戚である京都の門跡寺院安祥寺を継ぐように勧められ、高野山大学の予科に入学する。生い立ちの途次に自ずと抱くに至った無常観が、引野收をその方向に導いたのであろう。

その入学以前に短歌と出会い、楠田敏郎の主宰する「短歌月刊」に参加していた。入学後になって、その死までの五十年間を盟友として競い合い信じ合った学友の友松賢と「高野山支部」を結成し、歌づくりにのめり込む。

一九四〇（昭和十五年）年、大学の仏教美術科を卒業し、神戸に戻って、同年の春、須磨

高等女学校の教員として就職する。が、その翌年の三月、突然発熱してそれが治まらず、肺結核と診断され、そのまま二年間に及ぶ療養生生活を過ごすことになった。二度めに訪れた大きな不運の咳ばらいを、引野收は自分の咳ばらいよりも確かに聞きとつたに違いない。

そのあと一応症状が安定し、元の学校に復職する。そして二年後の一九四五(昭和二十)年の終戦直後、寺院の後継者になる約束を拒んで、かねてより互いに心を通い合わせていた歌仲間の濱田陽子と夫婦の絆を結ぶ。不運はその姿を潜め、ようやく幸運の女神が顔をのぞかせ始めたよろこびを、引野收は妻陽子共々謳歌したはずである。

しかし、その期間はあまりにも短かった。新婚生活のわずか三年後に再発し、たちまち病菌に肺から腸、さらに脊髄へと全身を容赦なく侵され、ついにそのまま立てなくなり、天井の節穴しか見ることのできない絶対安静の仰臥の状態を、死に至る四十年間にわたり強いられた。三たび現れた不運をむかえ、引野收はただただその機嫌をとりつつ、うまく飼ひ慣らすしか術を持たなかった。

専門病院への入院を拒否し、伏見の山沿いの〈阿吶山房〉と名付けたトタン屋根の家屋に、「生活保護法」による援助金を受け、妻

の献身的な介護によって何とか生きつづけた。見舞いに訪れた医者である歌人が、「この病状で生きていられるのが、医学的に見てわからない。奇跡としか言いようがない」と、吐息をもらした。本人は、「全身みんな、ふぐりまでもが膿だらけですわ。いまのとこ無事なのは脳味噌だけで、それがやられたらおしまいですなあ」と平然と言つての

け、訪問者たちをたじろがせたあと、手鏡の中に客たちの顔をとりえてにやりと笑つた。

### 仰臥の視床に映る曼荼羅

病窓を流るる雲に意味づけて妻よ妻よ  
ほら御覧あれがヘルシヤ猫

『マダムとボエム』

窓下に恥部の名をいふ童子ゐて微熱の  
險重くわが閉つ  
痛む胃をなでてゐる掌に臍の毛の長さ  
三本を小発見す

一九五〇(昭和二十五年)年刊行の第一歌集『マダムとボエム』中の作品である。微熱と呼



引野收と濱田陽子(1940年)

吸困難に苦しみながらも、単なる嘆き節や怨み節の歌で終わらせることなく、今ここに生きて在る己の思いのままを歌い上げようとしている。モダン・リズム風の歌もあれば、写実風のものもある。いずれの歌からも、死と闘ぎあうというよりも、むしろそれと馴れあっている仄かな温もりの中から、軽妙な味わいが滲み出ている。

短歌に対する専心の構えが増すにつれて、不思議なことに危篤状態はそのまま安定し、引野收の作歌活動は、得体の知れない何者かが憑いたかのように、いよいよ精力的につづけられていく。歌の仲間たちとの自由な発表の場がほしいという願いのもと、同人誌に近い歌誌として「短歌世代」を創刊し、引野收

# 引野 收

「短歌月刊」時代。後列右から6人目が引野收、  
前列右から4人目が濱田陽子



はさらに作歌意欲をかりたて、その後、引きつづき五冊の歌集を上梓するに至った。すなわち、『終宴』（一九五二（昭和二十七年）年）、「窓」（五八（同三十三）年）、「石牀の歌」（六六（同四十一）年）、「冷紅—そして冬」（八一（同五十七）年）、「白檜館遺文」（八三（同五十八）年）である。ともあれ、それぞれの歌集から、作品を二頁ずつ掲げてみよう。

セロファン紙当てて接吻愛しみし病竈  
浅き日も過ぎたり

『終宴』

子規死にし三十六歳を越さむこといつ  
よりかたくらみの如くわが秘む  
わがために未来と言はば死後のことい  
かに排かれ漂ひゆかむ 『窓』  
たのめなき一夜の暁を待つこころふぐ  
りの膿はたれ流しおく  
〈炎の女〉いま平凡な看護妻薔薇垣ご  
しの風しにもに坐す 『石牀の歌』  
人の計に勝ち関に似し声をあぐ時を距  
ててまた歎かんに  
歯型とどめる烈しき愛も知らざれば藍  
清冽にわが水子の忌 『冷紅—そして冬』  
夢なれば足萎えならぬわが歩みそして  
随い来る陽子さん  
人なれば醜ふかむのみ昆虫のように簡  
潔なる死にざまぞあれ 『白檜館遺文』  
死のきわの猫に掌をあて禱りおり 生  
あるものには生まれ変わるな  
一歩も外に歩み出したことはない。いや、  
ベッドから床に下り立ったこともない。風光  
の歌を詠みたくとも見ることができない。こ  
こにある歌の対象は、ひとりの妻と、ひとり  
の己と、その己が抱える恨み辛みでしかない  
にもかかわらず、いやそれゆえにこそ、正念  
こめて、ただもう一途に「己の歌」を死の寸  
前まで詠みつつけることができた――。

しだいに、というより、ようやく「引野短  
歌」の存在が、歌の世界で知られるようにな  
り、一九八二年には「第八回 現代歌人集會  
賞」を、一九八四年には、新日本歌人協會よ  
り「渡辺順三賞」を受賞した。〈死者による  
生者の歌〉とも言える特異な作品が光を浴び  
たのである。本人は素直に喜びの声を上げた。

## 終幕を飾る光芒

もう一冊歌集が残された。引野收の没後、  
遺作を濱田陽子が手書きし、『終冬儀式』と  
題名をつけて手許に置いていたものである。  
『引野收・濱田陽子全歌集』刊行（一九九九  
年）の折に、末尾に収載された。

文字どおり、絶唱と呼び得る作品と言えよう。  
いかような死にざま致し候わん終の無  
惨は妻のみが知る

生命なきものは気安しいのちなきもの  
は良きかな不死なる石ら

淡雪のそのひとひらのふたひらの地に  
つききを浮きただよえり

美しきものは脆しとなしながら散りの  
まがいに凍たり一花

手鏡のさくらふぶきも見尽さんうつつ  
現し身寐とぼけ仏



誰からの引き立ても押し上げもなく、生きのびるための一切の世話を妻ひとりに頼って、ただひたすらに歌を詠み上げ、逆にその一首一首の歌を、己の命を保つための一滴の血のように、わが身わが心に注入しつづけた。その姿はもはや、汚辱にまみれた病者ではなく、まさに鬼気迫る怖さと、仏に近づいた莊嚴さに包まれているように見えた。

誕生の刹那から身と魂の内に忍び込んでいた〈不運〉は、引野收自身の思いの外なる長命と遭遇し、いつのまにかその凶々しい昏さ

を失い、しだいに影を薄めながら遠ざかった。

## 無への帰依、無からの甦り

一九八七（昭和六十二）年の歳末、いよいよ病状が険しくなりながら、なお自宅を離れようとしなかったが、翌年の春に至って、ようやく診察医の病院に移された。その六日めのさくらの花がまだ散り残っていた四月十一日の未明、脳梗塞が悪化して息を引きとる。享年七十。「脳がいかれたらおしまいですわ」という本人の予言どおりの臨終であった。ただ、相手が永年の仇敵である結核菌ではなく、予期せぬ脳梗塞と名の刺客であったことが、引野收にとっては意外な相手であったかもしれない。

その死に顔には、不運な一生を過ごしたという苦渋にまみれた鬨りはなく、むしろ、妻濱田陽子にむけての愛惜の念や、心服の友であった短歌に対しての謝意を含めて、それなりに幸せな生涯を全うすることができたと思う、慰藉と安堵の表情を優しく浮かべていた。別して付記しておきたいこと若干。

永遠とおもえるながき時のなか樫立てり  
黄なる彩雲の涯

『石牀の歌』

京都・伏見城内の碑に彫られている、引野收の作品としては、珍しく明るい叙景歌である。幻に見た景であろうか。〈樫〉は作者自身の変身の願望であり、〈彩雲〉は愛する短歌の美的比喩と読みとれなくもない。それと対蹠的に、忿怒し祈念しながら、命終に至るまで、百数十首に及ぶ〈反戦の歌〉を詠み続けている。その一首をここに引く。

足たたぬわれら反戦を叫びつぐ注射にて  
處分されざる前に

『終宴』

夫を冥界に見送ったあととのわずか四年後、妻の濱田陽子は大腸癌を病み、「いちどでいから富士山が見たかった」という思いを残して後を追った。その作品一首を掲げておく。

さくらの日に逢いてさくらの日に別る  
ながくみじかしこの世の時間 『秋冬記』

引野、濱田の弔いに際しては親族誰ひとり現れず、友松賢を葬儀委員長とする歌仲間で行われた。歌人数十人の参列があった。ふたりの遺骨は、葬儀の行われた京都の伏見にある本門仏立宗の妙福寺に預けられたままになっている。墓はまだない――。

（よねみつ・ひでお「黒曜座」編集代表）